

第五皇女の成り上がり！

捨てられ皇女、皇帝になります3

エーデル

アンリの仕事仲間である
服飾師の女性。
作中のある人物と意外な
交友関係にある。

カーク

アンリの元を
訪ねてきた青年。
アンリに対して
並々ならぬ思いを
抱えている様子。

ジオルット

ツェルバキア帝国の第五皇子。
母の祖国である大国の後ろだてを持ち、
何不自由ない生活を
送っているように見えるが……？

ユーゼリカ

本作の主人公。ある時は
大国・ツェルバキア帝国の第五皇女、
またある時は下宿の管理人さん。
次期皇帝を選ぶための、
皇太子選に参加中。

フィル

下宿の住人で植物学者。
優しく紳士的な性格だが
守銭奴な一面も。
第二皇太子とも交友が
あり、なにやら大きな秘密を
抱えているようで……

アンリ

下宿の住人で役者（志望）。
女性を見れば優しくせずには
いられない性格で、
数々の乙女を魅了する。
今回過去が明らかになる？

第一章

その男がやってきたのは突然のことだった。

「尊き皇子殿下にお目通りが叶うとは、誠に幸甚の至り。伏して御礼申し上げます」

それなりの身分を感じさせる服装。かつての名残であろう洗練された仕草。そして、少し訛りのある言葉使い。謁見を要求する書簡に記してあった素性はどうかやら虚偽ではなさそうだ。

「……旧フオレストリア王家に仕えていたそうだな」

上座の大椅子にもたれた皇子の声がけに、男は畏まって頭を垂れた。

「は。今は亡き、廃れた家でございます。殿下の御前で口にするのもお恥ずかしいほどです」

「別に恥じることはない。我が私宮とて変わらぬだろう？ 今や人も少なく荒れている」

自嘲の目つきで室内を見やる皇子は、不摂生のためか顔色が優れなかった。落ちくぼんだ目には光がなく、退廃の空気をまとっている。

「恐れながら、なんとお勞しいことかと怒りを募らせておりました。殿下がこのような仕打ちを受けておられるのはおかしゅうございます。殿下は何もお悪くはございません。わたくしがお助け参らせましょう」

「ふん……。父上の命令でこうなっているのに、どうやって助けるというのだ」

「お耳汚しでございますが、お聞き入れくだされば……必ずや殿下の本懐を遂げられるかと」
そう言つて男は、ちらりと壁際に目を走らせる。そこにいた「もう一人の皇子」の存在を、どう扱うべきかというように。

それに気づいた皇子は、同じく視線をやり、軽く手を振った。

「構わん。ここにいる時点で他人ではない。やつにも聞かせろ」

「……承知いたしました。では申し上げます」

男はそこようやく顔をあげた。

「フォレストリアの王女とその娘である第五皇女には、おぞましい秘密があるのでございます」
その目には、底知れぬ冷たい感情が浮かんでいた。

実りの季節を迎え、ツエルバキア帝国の皇都は一層賑わいを見せている。

赤や黄色に色づいた街角の木々。露店の荷台を彩る豊かな農作物。郊外から来た行商の荷車がずらりと通りに並び、冬物の装いになった人々が楽しげにそれらを値踏みしている。

秋の深まりを感じさせる景色が流れていくのを、ユーゼリカは馬車の窓越しに眺めていた。

もっとよく見たくてかぶつていたフードをはずすと、翠の瞳に浮かんだ興味深げな色があらわに

なる。さらりとこぼれた銀色の髪をよけ、街ゆく人々を目で追った。

（今の時季、皇都はこんなに賑やかなのね）

去年までは皇宮からほとんど出ることもなく暮らしていたから、新鮮な光景だった。可能ならば、お買い得な——という言葉を使うと従者のロランは渋い顔で注意してくるだろうが、とにかく安くて珍しい食材はないか探してみたい、などとちらりと思う。

しかし今日はお忍びで見物しに来たわけではない。浮かれて街歩きをする余裕はなかった。

「だめですね。また別の馬車がついてます」

御者と小窓越しに話していた従者のキースの報告に、ユーゼリカは車内に目を戻す。カーテンの隙間からでは、景色は垣間見えても尾行者まではわからない。

「どちらの殿下の馬車か、わかる？」

「さっきまいたのはヘンドリック殿下のところですね。御者に見覚えがありましたから。今ついでるのは……ちよつとわかりませんね」

再び小窓をのぞいたキースが悔しげに言う。

末弟である第十一皇子のヘンドリックは、まだ若いせいもあるのかわりと尻尾を出しがちだ。うちよろと尾行しているのはこれまで何度か確認されている。だが他の皇子はさすがに慎重だ。

「姫様、いかがなさいます？」

同乗していた侍女のリラも曇り顔だ。ユーゼリカはあまり迷わず、告げた。

「やめておきましょう。しばらく街中を走ってから皇宮へ戻つて。街を視察に来た体にするわ」

この頃ではもう言い慣れた台詞だったが、従者の二人は不本意そうに目を見交わした。

「しかし、今週だけで二度目ですよ。先週も似たような感じで行けませんでしたし……」

「仕方がないわ。本当の行き先を知られるわけにはいかないもの」

冷めた口調の主にも、キースは諦めきれない様子でまた小窓を見たが、無念そうに頭を下げた。

「申し訳ありません。尾行を振り切れない我々の責任です」

皇宮と下宿館の行き帰りの守り役である彼は、悔しげに唇を引き結んでいる。

気持ちにはわかるので、ユーゼリカは静かに彼を見つめた。

「今までが皆さん手ぬるすぎたのよ。仮にも皇女が城下へ出て、二週間も戻らないのに気づかなかった。本来なら宮中で騒ぎになっているようなことだけれど、私だから見逃されていただけ。脱落者が二人になって、そのどちらにも私が関わっていると思ひ込んで、やっと危機感を持ったのでしょうか。これまでのような適当な監視ではなく、徹底的に見張るべきだとね」

ツェルバキア帝国は現在、皇太子指名選の真っただ中にある。

三年後に皇太子を指名すると皇帝が宣言したのは今年の春のことだ。選ばれる条件は、『もつとも財を築き、国と皇宮を豊かにした者』。手段は問わないが、皇族の品位を落とさないこと、民を虐げないこと、他の候補者を傷つけないことなどの規則が出された。立候補した十人の皇子と一人の皇女は、それぞれ方策を練り、着手した。

皇女で唯一の立候補者であるユーゼリカは、国を豊かにするための人材を育てるという策をとり、亡き母の遺した館を下宿として改装し、才能ある店子たちを住まわせている。二週間ごとに下宿館

に出向いて店子たちの様子を見るという生活を始めてから、早数ヶ月。徐々に結果を出している者もあり、ゆっくりではあるが順調だと思っていた。

一方、候補者の中から脱落した者も出ている。第四皇子のベルレナードは装飾品の製造販売で財をなそうとしたが、その過程で街の人々に中毒事件を起こした。しかもそれを隠蔽しようとしたのが発覚し、皇帝から指名選失格と蟄居を命じられた。また第一皇子エレンティウスは母妃の遠縁である貴族が重大な背信行為をしていたのがわかり、それに対応できなかった責任を感じて指名選を辞退すると申し出、受理された。

店子との関わりの中でユーゼリカは偶然にも彼らの陰謀を知ることになり、ベルレナードを弾劾し、エレンティウスの遠縁の貴族とは群衆の前で対決するという形になった。もちろん、どちらも最初からそう狙ったわけではない。だが他の候補者たちはそう思わなかったようで、女帝になるためどんな手を使っても周りを蹴落とそうしていると誤解したのだろう。どのような方策を取っているのかは以前から探られていたが、ついに城下へひそかに出ていることをつかまれてしまったらしい。

その偽装工作としてカフェ経営を始めたり、化粧術に秀でた影武者を置いたりしているのだが、当初は目眩ましになったものの近頃はそれも難しくなっている。カフェのほうにも見張りがついているが、現在はまだあまり重視されていないようだ。

「八人分の監視を相手にしているのだから。いつかはこうなると思っていたわ」

それでも予想したよりは早かった。もう少しごまかせると思ったのにと、思わずばやく。

今ではどこへ行くにも誰かの尾行がついている。まるで八人の皇子が手を結び、持ち回りで追尾しているかのような隙のなさだ。

だがここで焦る必要はない。猶予はまだ二年以上ある。

「今は大人しくしていきましょう。そのうち機会はあるわ」

「……わかりました。ではロランにもそう伝えます」

キースが仕方なさそうにうなずき、御者に指示を出した。

従者の一人であるロランは下宿館に常駐し、ユーゼリカの不在中の維持管理を担っている。しばらく訪れていないので心配していることだろう。

「ロランは大丈夫でしょうか。姫様に会えなくて禁断症状が出ていないとよいのですけれど」

「あいつは姫様好きだからなあ。なるべく平然としてろと伝えるよ。店子たちの様子も聞いてきます」

「お願いね」

別の意味でロランを案じているらしいリラとキースにうなずいてみせ、ユーゼリカはカーテンの隙間から外へ目をやった。

賑やかで楽しい街。小さなガラス窓を隔てただけなのに別世界のようなうだ。見ていると羨ましさと同時に寂しさのようなものがこみ上げてくる。

名残惜しい気持ちで眺めるのをやめられずにいると、街ゆく人の中に見知った顔を見つけた。

ユーゼリカは目を凝らし、思わず身を乗り出した。

（あれは……アンリさんでは？）

黒髪の中性的な美貌の青年が、誰かと話をしながら歩いている。

詐欺師疑惑のある店子^{たなこ}の一人、今は役者の卵として励んでいるアンリだ。一緒にいるのはオレンジ色に近い茶色の髪をした女性だったが、すぐに通り過ぎてしまい、よく見ることはできなかった。

（逢い引きかしら？ 随分楽しそうだったわ）

相手は恋人だろうか。何しろ人目を引く美貌の持ち主で、かつ役者の卵である彼は恐ろしいほど女性に人気があると報告を受けている。

現在の劇団に所属する前、入団試験を受けた別の劇団が彼が原因で崩壊しかけたこともあるらしい。そんな逸話を聞いているせいか、一緒にいたのが取り巻きという名の信奉者の団体ではなくたった一人の女性というのが意外だった。

（私生活にまで口を挟むつもりはないけれど、念のため確認しておくべきね）

店子^{たなこ}たちが何気なく口外したことから皇女の自分にたどり着かれてしまう可能性も、まったくあり得ないとは言いがたい。風変わりな下宿館と、時折訪れる管理人の若い娘、それだけでも充分人々の好奇をくすぐるはず。情報を集めている皇子たちの耳に入らぬよう手を打っておかねば。

事務的に考えていると、不思議と苦いような心地になった。

この広い皇都でたまたまずれ違ふなんて奇跡に近い。なのに今は気安く声をかけることもできないのだ。せつかく会えたのと思うと、もどかしかった。

（他の皆さんも、ああして街で生活なさっているのよね。私がない間にも）

二週間ごとに皇宮と行き来していた頃。どちらが本当の居場所なのかわからなくなるくらい、下宿館での暮らしを満喫していたのが懐かしい。

遠慮のない物言いや裏表のない笑顔。皆で集まって食べる夕食。誰かの作業を他の皆でわいわい言いながら手伝ったこと。疲れて休んでいると、優しくお茶を淹れてくれた人とのひととき――。

あの空気を、もうどれくらい味わっていないだろう。

「……皆さん、変わりないといいのだけど」

こぼれたつぶやきは、我ながら元氣のない声だったかもしれない。

キースとリラが困ったように目を見交わしたのも気づかず、ユーゼリカはため息をついた。

店子^{たなこ}の皆さんへ

ごきげんよう。秋深まるこの頃、つつがなくお過ごしかしら？

しばらくそちらへ行けず申し訳ないわ。家庭の事情によるものでごめんあそばせ。

ところで、今日は皆さんにお願いがあつてお手紙をしたためています。

下宿館に入館されてから早数ヶ月。それぞれの道を進まれ、新たな人脈を築いた方もいることでしょう。なんてすばらしい。人との輪は財産よ。ぜひ大事になさっていただきたいわ。

それはさておき。入館時に交わした『下宿館のことを絶対に他人に漏らさない』というお約束のことは覚えていらつしやるかしら？

もちろん皆さんのことだから守つてくださっていると思うけれど、あらためてお願いするわ。

私が下宿館を営んでいるのは超極秘事項であり、親兄弟に知られたらどうなるかわからないの。

わからないけれど……おそらくは塔の最上階に一生幽閉されるとか、板を打ち付けただけの小舟で島流しにされるとか、まあ最悪は打ち首になるとか、そういったことになるでしょう。

皆さん。私の父も兄弟たちも恐ろしい人なのよ。私が打ち首にされるのを哀れと思つてくださるなら、くれぐれも秘密厳守でお願いしますわね。

それではまた。

あらあらかしこ リリカより

「以上、姫様からの伝言です」

神妙な顔で言い結んだロランを、食卓についた店子^{たなこ}たちは引き気味に見ていた。

下宿館の食堂。近頃訪れの途絶えた管理人から手紙が来たとのことで集められたのだが、予想もしない内容である。

「いや、怖くね？ つか物騒じゃね？ なんだよ、あらあらかしこつて。言ってる場合か？」

恐ろしげに口火を切つたのは小説家志望のイーサンだ。隣で役者の卵のアンリも美しい眉をひそ

めている。

「だね……。近況報告っていうから、私への伝言もあるのかと楽しみに聞いてたら」

「さらっと言うようなことじゃないですよ。打ち首とか……」

「ええ……人生で一度も言ったことのない台詞ですわ」

皇宮医官のリックと未亡人のシェリルが青ざめてうなずき合っている。店子たなこの中でも常識派といえる二人は管理人の近況が理解できなかったようだ。

「リリカさん、大丈夫なんですか？ 思ってたより危なそうですけど」

植物学者のフィルに真剣な顔で訊かれ、他の皆にも注目されて、ロランはたじろいだように見回した。

「いやだな、本気にしないでくださいよ。姫様流の冗談ですよ。時々大げさな物言いをなさって私たちを脅かすみたいなの、そんないたずらっ子なところがおありになるんですよ。知ってるでしょ」

一同は静まりかえった。これまでの管理人の言動をそれぞれ思い返している様子だ。

「……いや、微妙……じゃね？ 確かにたまにわけわかんねえこと言ってたけどよ。あれ、いたずらだったのか？」

「うーん……。天然の発言だとばかり思ってたよ」

イーサンとアンリが難しい顔で首をひねる。管理人の発言にたびたび突っ込みを入れてきた彼らにも、咄嗟に判断がつかないらしい。

「じゃあ、とりあえずリリカさんが怖い目に遭うことはないんですね？」

いくらかほつとしたようにリックが言ったが、ロランはキツと顔つきを厳しくした。

「お手紙にあったのは極端な例ですけど、お父上やご兄弟方に知られちゃまずいのは本当です。皆さん、絶対に口外しないように！」

「打ち首にはされないけど、それに近いことはあるかもしれないと？」

それまで黙っていた発明家のエリオットが、興味津々といった顔で口を挟む。

「ま、まあ、わかりませんけど、その可能性はなきにしもあらずなので」

「ええー！ 打ち首じゃないけど打ち首に近い怖いことってなんなんですか？ 打ち首を十だとしてら九くらいの怖さ？ でも他に打ち首っぽいことってあります？」

「ああもう、打ち首打ち首言わないでくださいッ。私だって言ってる嫌になるんですから！」

監視が厳しくなっているため念を入れて店子たなこにも重ねて口止めをしておくようにとの密命を帯びているロランだが、もちろん店子たなこたちには秘密なので説明に苦慮しているのだった。

「と、とにかく。怖い人たちののは事実なので、お願いしますね」

「けど怖いって言っても市井の人なんですよね？ お金持ちなのは聞いてますけど。跡継ぎ争いでそんなに揉めるって、どんな立派なお家柄なんですかねえ」

額の汗をぬぐいかけたが、エリオットの鋭い台詞にぎくりと固まる。

「は……はい？ どんなんて、それはあなた、由緒正しいお家柄……って、詮索しないでくださいよ！ かか関係ないでしょうが！」

「あつ、大丈夫です。そのへんは全然興味ないんで」

「興味ない人の切り込み方じゃないですよね!?　ちょ、本当にやめてください、困るので!」

「いや、まじでそこはどうでもいいって。機嫌損ねて追い出されたら困るのはこっちだし、姫さんが危なくねえっていうなら、この話は終わりにしようぜ」

イーサンが割って入り、他の皆も一様にうなずいた。

「最近来ないから心配してたけど、なんだかんだで元氣そうだし、ちょっと安心したよ」

「念を押さなくても下宿のことは誰にも言ってもいいよ。そもそも住居のことなんてそんなに聞かれせんし」

「ですねー。へたに人に話して、そんなに条件が良いなら自分も入居したい、なんて言われたらそれこそ困るし。ここ、もう部屋空いてませんもんね」

口々に言い合っ中、画家のレンはうんうんとうなずいている。終始無言なのはいつものことだがやはり彼も案じていたようだ。

あっさりした引き際、そして温かい反応に、ロランは戸惑いつつもほっとして息をつく。

(姫様が過激なことをお書きになるから、どうなることかと思っただけ……)

自分たちの恵まれた境遇を吹聴してないのは意外だったが、主の指令を守っていたのは褒めてやつてもいいだろう。あとは報告書をしたためて皇宮へ送るだけだ。

店子^{たなこ}たちが食事会の準備に取りかかるのを横目に見ながらひっそり別館に行こうとしたが、戸口をくぐろうとしたところで呑気な声に呼び止められた。

「あ、ロランさん。どこ行くんですか?」

にこやかに追いかけてきたのはフィルだ。あと少しで食堂を抜け出せたのにと、ロランは渋々向き直った。

「別館です。まだ仕事があるので食事は遠慮します」

「いえ、引き留めたいわけじゃなくて。リリカさんのことなんですけど」

先ほどのやりとりで納得したと思ったのに、まだ突っ込んでくるのかとロランは目をむいたが、フィルが耳打ちしてきたのは別の話題だった。

「本当のところ、次はいついらっしゃるんですかね?　頼まれてた薬草茶が溜まってきちゃって、結構な量になってるんですけど」

彼は趣味で育てた薬草を調合してお茶に加工し、ロランの主に出している。その打ち合わせや試験などでわりと密に行き来をする間柄だからか、動向が気になるようで、これまで幾度となくその質問を受けていた。

「ですから、本当にわからないんですよ。すぐお忙しいみたいで……私のほうが訊^ききたいくらいなんですから」

「あー……そうですか」

もう何度も同じ答えを聞いただろうに、フィルは今回も残念そうな顔になる。彼の青い瞳に陰りが差したのにロランは鋭く反応した。

「ちょっと?　一応確認させてもらいますけど、そのお顔は姫様に会えなくて寂しいなっていう顔じゃないですよ?　まさかとは思いますが、姫様に不埒な感情を抱いて狼藉を働く心づもり

じゃないでしょうねえ？」

前から思っていたが馴れ馴れしいのだ。個別に訊ねてくるのが答えなのではないか？

にらみをきかせつつ問うと、フィルが目を瞬かせ、心外だという顔になる。

「ひどいなあ。僕のことをなんだと思ってるんですか？ そりゃリリカさんには会いたいですよ。貴重な収入源がなくなったら懐が寂しくなるし」

「寂しいってそっち!? 姫様を金儲けの道具にしないでくださいよ!」

「道具だなんて、とんでもない。僕はただ、リリカさんの喜ぶ顔が見たい一心でお茶を調合してるだけなのに。彼女のことを思うと自然と笑顔になるんですよ。今回は新作が多めだから一種類あたりの単価が増えるといいなあって」

「それでにやにやしながら調合してるんですか!? やっぱり金つると見なしてるじゃないですか!」純粋に寂しさから会いたがっているならまだ可愛げがあるが、隙あらば金を引き出そうと企んでいるとは。言語道断だ。

敵意むきだしで罵倒しようとしたロランだったが、ふっと疲れを感じ、口をつぐんだ。

監視が厳しくなり行動が制限されている中、主がどれほどつらい思いをしているか。おそらくは尾行のみならず城内での攻撃も増しているはずだ。そんな時に傍にいられないことに、ロラン自身も堪えていた。

「……当分はいらつしゃいせんよ。姫様は今、大変なんですから」
ぼそりと言い置くと、それきり後ろも見ず食堂を後にする。

急に元気をなくした彼をフィルが驚いたように見ていたのも、何か言いたげに声をかけかけたのにも気づくことはなかった。

皇宮では定期的に皇太子指名選の立候補者を集めた茶会が催されることになっている。

場所は本宮殿のロイヤルサロン。指名選の規則に反していないか確認がされた後は懇談となり、その間に内務大臣が誓約書の更新などをするというのがいつもの流れだ。

代わり映えのしない内容にこの頃は候補者たちも飽きているのは明らかだったが、二人目の脱落者が出て初めての茶会となる今日は、奇妙な緊張感が流れていた。

「あれ？ なんだか、人が減ってきた感じがしない？」

最後に席についた第八皇子エンディミオンが一同を見回し、誰ともなしに言い放つと、円卓のあちこちから鋭い視線が飛んできた。

彼の隣席にいたユーゼリカはそのとばっちりを受けてしまい、ちらりと目をやる。

「大きな独り言ね。私までにらまれたわ」

「ほんとだ。にらむようなことは言っていないつもりなんだけどねえ」

あっけらかんと彼が小首を傾げると、まばゆい金髪がふわりと揺れた。澄んだ青い瞳はきらきら輝いている。まるで絵画の中の天使のごとき神々しさだと宮廷人に賞される美貌だ。だが人を食っ

たような物言いといい、なかなかの曲者であるのはユーゼリカも察していた。

誰かが文句を言うのではと思いつつ茶を飲んでみると、案の定、けだるい声が割り込んだ。「感じじゃなく、実際に減ったんだよ。引き算くらいはできるだろ？」

小馬鹿にしたように言ったのは、第五皇子のジオルトだ。

黒髪と浅黒い肌に、耳にはめた金の大きな装身具がよく似合っている。片肘について頬を支え、だらしない姿勢なのに、その不遜な態度が不思議とさまになっていた。彼の母妃は東西の大陸文化が入り交じる境界の王国の出身であり、身につけるものもその影響を受けているが、彼自身の雰囲気も独特なものがある。

揶揄するような言葉にも気にした様子はなく、エンディミオンは今気づいたというふうに手を打った。

「そうかあ。ベルレナード兄上だけじゃなくエレンティウス兄上もいなくなったんだっただね」

「はっ。白々しい」

「よかったよね、敵が減ってさ。しかも二人とも自滅してくれるんだもん。ついてるよねー？」

ジオルトが鼻で笑うのを無視するかのように、エンディミオンはにこしながらユーゼリカに同意を求めてくる。愛らしいことこのうえない笑顔だが、今は迷惑としか言いようがない。

「私に聞かないでくれるかしら」

「いやいや、みんなに言ってるんだよ。ここにいる人、全員同じ気持ちでしょ？ 邪魔者が消えてよかったーってね」

そう言って彼は一回を見回す。表情を消している者、目をそらす者——反応はそれぞれだ。

ジオルトもそこをごまかす気はないらしい。肩をすくめ、同じように見回した。

「そうだな。立候補した以上、俺たちは敵同士だ。敵が減るほど好機は増える」

「もっと減ってくれたら助かるんだけどねー。蹴落とすのは場合によつてはこっちが危なくなっちゃうから、また自滅してくれたらいいな。ねっ？」

「私に聞かないで言っただけだよ」

そんなに可愛らしくのぞきこまれても困る。ユーゼリカは無表情で茶を飲み続けた。

しかしそのやりとりが引つかかったようで、ジオルトがせせら笑うように見据えてきた。

「まさかおまえら、自分が残れると思ってるのか？ 大した自信だな」

「ええっ？ みんな、自分が勝ち抜くと思ってここにいるんじゃないんですか？」

「全員に機会があるっていうのは建前だろ。実際には父上のあの言葉は年長の皇子に向けて発せられたものだ。まさかおまえら年下組まで立候補するなんて思ってただろうさ。真に受けちゃって、気の毒に」

どうせ勝てないのと言いたげな口調に、年少の皇子たちがみじろいだ。ある者はにらみつけ、ある者は動揺したように目を泳がせている。

年端もいかない彼らが自ら立候補するとは考えにくい。だが皇太子を選抜で決めると言われた以上、母妃たちも黙ってはいらなかっただろう。

(その意味では、確かに可哀想なのかもしれないわね)

あの皇帝の宣言は後宮に希望ならぬ野望を生んだのだ。妃にも皇子たちにも優劣はないとされる中、誰でも皇位を望めると言われたようなものだから。勝ち抜くことができれば、だが。

年下組のくぐりにいることなど忘れたかのように、エンディミオンが小首を傾げて言う。

「年長の皇子って言っても、すでにお二人はいませんか？ 年上組のほうで脱落してますよ？」

「ああ。だから残りの、俺たちの中の誰かってことさ」

ジオルルトはそう言って自身の両側を手で示した。わざとらしく、恭しげに。

「第二皇子のアレクセウス兄上、第三皇子のオルセウス兄上、第五皇子の俺に——ま、第六皇子のアルフォンスくらいまでか」

彼の隣に座ったアルフォンスが、ぴくりと眉を跳ね上げた。ついでのような言われようにかちんと来たらしい。

しかし彼が何か言うより先に、その隣から異議が上がった。

「年長だから優秀だとしても？ 他はともかく、ジオルルト兄上が適格とは思えませんが」

冷ややかに言い放ったのは、第七皇子のハルバートだ。緑がかった茶色の髪に緑の瞳の彼もまた優れた容貌の持ち主だったが、見下すような目つきと口調のきつさのせいかな、その美貌に陰鬱さが差しているようだった。

ゆつくりとジオルルトがそちらを向く。弟皇子につられたように目に鋭さを乗せて。

「どういう意味だ？」

「そのままの意味です。皇太子たる者、国を背負う品格が必要でしょう」

「俺にはそれが無いと？」

「ええ、見当たりませんね。ふしだらな噂だけはやたら耳に入ってきますが」

「はっ。色事を毛嫌いするような歳かよ。お子様は黙ってろ」

「婦女子の寝室に入るだけが能の方に指図をされる筋合いはありません」

ハルバートは軽蔑のまなざしでジオルルトを見据えている。ジオルルトの艶めいた噂はユーゼリカも聞いたことがあるが、それにしても攻撃的な態度に思えた。

と、口論に割り込むように高笑いが響いた。

「確かに！ 遊び人の皇太子なんて聞こえが悪い。ジオルルト兄上もこの際、辞退なさってはいかがですか？」

アルフォンスだ。先ほどの反撃に出たらしい。しかしジオルルトは薄笑いを浮かべて応戦した。

「ではおまえを道連れにするか。賭博大好きな遊び人さんよ」

「なっ！」

「あはは。すごいな、遊び人ばかりだねー。この前も大金を賭けてやつちやっただか聞きましたけど、大丈夫ですかー？」

エンディミオンが楽しげに囁し立て、アルフォンスの頬が紅潮した。

「余計な世話だ！ おまえ、どこでそんなことを……！」

「ふん。帝国民としては、ふしだらな皇太子より散財癖のある皇太子のほうがまずいよな」
「勝ち誇ったように言わないでください。どちらもうだらな人格には変わりありません」

「なんだとハルバート！」

「あれ、ここでまた二人脱落かなー？」

「黙ってろ、エンディミオン！」

もう誰と誰がやり合っているのかもわからない。まるきり子どもの喧嘩だ。まさに時間の無駄である。ユーゼリカは完全に無の目つきになっていた。

（付き合いきれないわ。帰ってもいいかしら）

何杯目かわからない茶を機械的に飲んでいると、やり込められて頬を引きつらせていたアルフォンスが、ふいに嫌な笑みを浮かべた。その目はジオルトに向いている。

「ハルバートの援護をするわけではないですが、お気をつけになったほうがいいのでは？　あまり遊びすぎると痛い目を見ますよ。兄上ではなく、相手のご婦人がね」

じろりとジオルトも彼をにらむ。

「それこそ余計な世話だ」

「忠告しているのですよ？　皇族に近づきすぎた身の程知らずの女が、どんな末路をたどるのか。まさか、ご存じないでも？」

冷たい沈黙が落ちた。

ジオルトが手を伸ばし、アルフォンスの胸ぐらをつかんだ。その勢いに、驚きとも悲鳴ともつかない声があがる。

「……知ったふうな口をきくじゃないか」

低い声で言ったジオルトに、アルフォンスはたじろいだ様子を見せたが、すぐさま挑戦的な顔つきに戻って応える。

「候補者同士の私闘は禁止ですよ。このまま失格になるのを望みで？」

ひりついた空気が流れた。にらみあう二人はまさに一触即発といったふうだ。

ただの口喧嘩だったはずがまさか乱闘になるのかと、ユーゼリカが思わず息を詰めて見ていると、彼らの間にぐいっと割り込んだ者がいた。

「おいおい！　いい加減にしないか。喧嘩するほど仲が良いとは言うが、それにしても腕白がすぎるぞ？」

ははは、と朗らかに笑いながら二人の肩に手を回しているのは、アレクセウスだった。

金の髪に湖水のごとき翠の瞳。皇帝の子女の中でもっとも美しいと賞される彼だが、そのにこやかな表情も底抜けに明るい声も、今は場違いとしか言いようがなかった。

「まさか、昔みたいに取っ組み合いの喧嘩を始める気かい？　もう子どもじゃないんだぞ？　あの頃は私も付き合ってたが、今はもう無理だ！　この体に傷でもつけば悲しむご婦人が大勢いるからね。だから今日は一つ、指相撲くらいでやめておけ。な？」

ぱちんと片目を瞑って二人を交互にのぞきこむ。宮廷の女性たちが見れば卒倒したかもしれない麗しさだ。

しかし、あいにくつかみ合った弟たちには通用しなかったらしい。兩人ともしらけた顔になっている。

「は……？ なんのことです？」

「取っ組み合いなんてやった覚えはないですがね」

「ん？ そうだったっけ？」

きょとんと瞬いたアレクセウスだったが、やがて思い出したように額を叩くそぶりをした。軽く舌を出し、小首を傾げる。

「ああ、そうだ、間違えた。私が一人で芝生をごろごろ転がっていたんだった。陽射しを浴びたまぶしい殿下が見たいと皆が言うもので、要求に応えてあげたのだった。周囲には花が咲き乱れ、背後の池には白鳥が飛来し、きらきらと風が光る中、芝生の上で寝そべる私に降り注ぐ美辞麗句の嵐……。あれは確か十二歳の春だった。いやあ、懐かしいなあ」

しまいに遠い目をして思い出にふけり始めてしまった。うんうんとうなずく仕草も自分に浸っている表情もしごく楽しそうなのは伝わるが、彼以外全員にとってはまさにどうでもいいと言えない。

はあ……とため息をついてジオルトとアルフォンスが体を離した。

どちらももうんざりした顔で席についている。あまりの鬱陶しさに直前までの緊迫した空気は消え去ったらしい。

我関せずといった様子で終始黙っていた第三皇子のオルセウスが、ようやく口を開いた。

「もう座れ、アレク」

「え？ なぜだい？」

「全員おまえに胸焼けしている」

指摘を受けたアレクセウスは、不思議そうに一同を見回した。

「だから、なぜ？」

そこへ図ったかのように内務大臣がやってきた。別室で誓約書の更新をしていた彼は、場の雰囲気^{きふい}に気づいた様子もなく恭しく宣言した。

「皆様、これにて今日は終会といたしたいと存じます。ご足労いただき拝謝申し上げます」

あちこちからため息が聞こえた。最後の最後で、どつと疲れたといったふうだ。

ユーゼリカも同様だったが、すぐに気持ちを切り替えた。これ以上時間を無駄にしたくない。

「あーあ、疲れちゃったね。なんだかみなびりびりしてるし」

さつさと帰ろうと回廊へ出たところで、エンディミオンがぼやきながら追いついてきた。悪びれないその顔をちらりと見やる。

「最初に火をつけたのはあなただったように思うけれど」

「だって、この茶会っていつも変わり映えないじゃない。少し突けば何か新しい情報が出るかと思っただけ」

「それで邪魔者が減っただのまた自滅しろだの言ってみたと？ 勝ち抜く自信があるみたいね」

並んで歩きながら何気なく言うと、エンディミオンは肩をすくめた。

「言っておくけど、僕は別に皇太子なんてなりたくないんだよ。母上の期待があるから仕方なくやってるだけ」

「あれだけ煽っておいてよく言うわ、と笑うべきかしら」

「本当だって。さっきのはただの様子見だよ。自分が選ばれなくても、最終的に誰が皇太子になるかは君も興味があるでしょ？」

にこっと微笑まれ、ユーゼリカは無言のまま背後へと目を向ける。

興味が無いわけがない。この大帝国を統べるのは誰か、その器を持つ者はいのか——茶会のたびに観察してきた。それは自分が勝ち抜いてみせるという決意とはまた別のものだ。

今日の茶会は始めからおかしかった。二人の脱落者が出て、焦燥感が漂っていると云おうか。

おかしいと言えば、アルフォンスと採めた時のジオルトも様子が変だった。あの程度の口論で胸ぐらをつかむとは唐突だったように思う。直前までは飄々と言いつ返していたのに。

(アルフォンス殿下はあの時、なんと言ったのだったかしら。何が癪に障ったの？)

ジオルトはとくに私宮に戻ったように姿が見当たらない。アルフォンスはどこかで見渡せば、ちようど扉から出てきたところでオルセウスに呼び止められ、話をしている。

と、アルフォンスが急に顔をこわばらせ、振り切るように踵を返した。オルセウスのほうは無表情のまま、去っていく彼をただ見ている。

こちらへ歩いてきたアルフォンスは、ユーゼリカの視線に気づくと憎々しげににらみつけてきたが、エンデミオンと一緒にいるのを見ると顔を背けて足早に行ってしまった。

「怖いねえ。でも、ちょっと苛々しすぎじゃない？」

面白そうに囁すエンデミオンをよそに、ユーゼリカは眉をひそめてそれを見送っていた。

皇子たちの間に吹き出した不協和音。これまでも決して仲が良いわけではなかったが、いつもと違う不穏さを感じるのは気のせいだろうか。

晴海^{せいかい}の宮は、海に面した港湾都市と豊かな領地からなる旧王国から嫁いできた妃の私宮である。

実家の財力が惜しげもなくつぎ込まれた豪華な宮殿であり、青い絨毯は海を、純白の円柱がつらなる回廊は旧王国の神話に出てくる神殿を表し、庭園には船遊びができるほど大きく深い池が広がっていた。壁一面に宝石が埋め込まれ、波間のきらめきを再現しているという徹底ぶりである。

それらを受け継ぐ予定のアルフォンスにとって、まばゆい私宮は落ち着ける場所だ。しかし今は装飾過多な室内がやたら目について仕方がなかった。

「おい！ 酒はまだか！」

どんとと拳をテーブルに叩きつけると、侍女たちが飛び上がるようにして出て行った。

茶会から戻って以降、長椅子を蹴りつけたり花を花瓶ごと払い落としたりとやったせいで、恐れをなしているのだ。その怯えたような態度にも苛立ちが募る。

むしろくしゃしながら長椅子に倒れ込んだ。天井のシャンデリアを見上げ、唇をかみしめる。

茶会の後、サロンを出たところで呼び止めてきたオルセウスは、一言こう言った。

『あまりやりすぎるなよ』

初めはジオルトとのかを注意されたのかと思った。大して親しくもない第三皇子がどうしてまた、と不思議だった。

『あれしきのことでお叱りを受けるのです？ ただの口論じゃありませんか』
嫌味をこめて返してやったら、冷ややかな目つきを向けられた。

『そちらじゃない。クラウスとエレンティウス兄上の件だ』

その一瞬、思考が停止した。

『わかるだろう？ 何のことか』

冷たい瞳に見据えられた時、まるで父帝に射すくめられたような気がした。

第一皇子エレンティウスが指名選を脱落したのは、もとはといえばアルフォンスの企みが原因だ。彼の遠縁であるクラウスと手を組み、ユーゼリカの縁談相手として宮廷に登場させ、彼女を罫にはめる策を弄した。エレンティウスが隠れ蓑となり、アルフォンスの関与は疑われない。それを見越してエレンティウスの母妃を引き込み、協力させた。

ところが罫を仕掛けた側のはずのクラウスは逆に罫にはまり、彼の父ともども大罪が発覚して裁かれることになった。そして父帝に指名選の辞退を申し出たエレンティウスは、なぜかこの一件にアルフォンスが絡んでいることを公言しなかった。もちろん公言されては困るのだから命拾いしたと言えるのだが、黙っている理由をエレンティウスにひそかに問い合わせても、のらりくらりとかわされるばかり。彼に弱みを握られたのだと気づいた時にはもう遅かった。彼と母妃は父帝の監視下に置かれ、手を出せなくなってしまった。

エレンティウスは連行される直前、ユーゼリカと二人で話をしている。彼の口から一連の件が伝わったのではないか——しかし確かめる術がない。

あれ以来、ユーゼリカと目が合うことが増えたように思う。探るような、意味ありげな視線を感じるたび、いつ父帝に暴露されるかと焦りが募り、気が休まらない。

企みの首謀者が誰なのか知っているエレンティウス。彼から聞かされたかもしれないユーゼリカ。二人だけでなく、まさかオルセウスも真相をつかんでいるのか？

「……くそっ」

苛々と吐き捨てた時、遠慮がちなノックの音がした。

おそるおそるといったふうに扉が開き、側近の騎士が顔をのぞかせる。

「殿下。お客様がおいででございますが……」

「入るぞ、アルフォンス」

遮るように響いた声は懐かしいものだった。アルフォンスは驚いてそちらを見やった。

「ベルレナード兄上……！」

片頬に笑みをたたえた第四皇子ベルレナードが、葡萄酒の瓶を掲げて立っていた。

彼は現在、父帝の命令により私宮に蟄居している身だ。皇太子指名選の方策のためとった行動により中毒事件を起こし、それを隠蔽しようとしたと告発され、民を虐げないという規則に抵触したとして指名選を失格になったのである。彼の母妃もその一族も大いに嘆き、父帝に取りなしを図ったが、許されることはなかった。かといって仮にも皇子の身分であるし、直接的な刑罰を与えるわ

けにはいかなかったのだろう。幽閉同然とはいえ鎖に繋がれて閉じ込められているわけではないから、こうして私宮を出てくることもある。

実を言えばアルフォンスは、彼が蟄居を命じられてからもひそかに交流していた。彼の敵を討つためにユーゼリカを陥れようと画策していたのだから、彼を慕う気持ちは変わっていない。しかし表向きは父帝に罰せられている人である。白昼堂々と私宮を訪ねてこられて、ひやりとする思いがなくてはなかった。

「ど……どうなさったのです、突然。こんな時間に……。何か、ありましたか？」

かつて宮廷淑女にもてはやされた美しい容貌は、頬がそげ、顔色は青白く、金色の髪は整えられず伸びてしまっている。ただ、目は変わらず自信にあふれていた。一時は憔悴していたのを見ていただけに、異様さを感じた。

ベルレナードはアルフォンスが寝ていた長椅子にどさりと腰を下ろすと、皮肉げに笑んだ。

「明るい時間に訪ねてきては迷惑か？」

「い、いえ、まさか！ 急だったので驚いたのですよ。抜け出していらしたのでしょうか？ 見張りのほうは大丈夫なのですか？」

「ふん。あんな輩、金さえ積めばいくらでも言うことを聞く」

「兄上がお咎めを受けないのならいいのです。でも、本当に何かあったのですか？」

これまでも行き来はしていたが、あくまで人目につかぬよう夜中にやっていた。誰かに見られたらまずいことくらいわかっているから、ベルレナードもそこは徹底していたのだ。だからこそ、よ

ほどの緊急事態でも起きたのかと思ってしまった。

内心うろたえたアルフォンスをよそに、彼は持参した葡萄酒を機嫌良くあおっている。

「おまえこそ荒れているようだが、どうしたんだ」

「ええ……実は、先ほど茶会でオルセウス兄上から意味ありげな忠告を受けました。もしかしたら、エレンティウス兄上とクラウスの件に関与しているのを知られているのやも……」

仕方なく打ち明けると、ベルレナードが舌打ちした。

「面倒だな。脅されたのか？」

「いえ、そういう口調ではありませんでした。本当に忠告といった感じで」

「気をつける。父上に告げ口されたらおまえもおしまいだぞ」

アルフォンスはぐつと詰まり、悔しげに彼を見た。

「では諦めるのですか？ 私は嫌です。ユーゼリカを引きずり下ろさねば気が済みません」

「わかっている。誰よりそう思っているのはこの私だ。あの女だけは絶対に許さん……」

ベルレナードの目が凄みを帯びた。憎悪の色を浮かべ、まるでそこにユーゼリカがいるかのように一点をぎらぎらとにらみつけている。

常に見下していた、取るに足らない存在だった落ちぶれた異母妹が、華やかにもてはやされていた自分を糾弾し転落させた。他の誰にそうされるより憎しみは何倍も大きいのだろう。その気持ちはアルフォンスにも痛いほどわかった。

そこでベルレナードはふいに笑みを浮かべた。歪んだ歓喜の表情だった。

「今度こそ息の根を止めてやる。おまえも私も関わりのないところで、あやつは素質だけで失脚させてやるんだ。いや、素質ではなく素性か。はははは！　ざまあ見るがいい！」

「兄上……？　どういふことなのですか？」

面食らうアルフォンスに、ベルレナードはまた酒杯をあおり、顔を近づけてきた。

「情報があつた。あやつは母親についてな」

「エルルーシユカ妃の？」

もう何年も前に亡くなった妃だ。彼女の死を機にその子どもたちは皇宮の外れの私宮に捨て置かれ、父帝もまったく寄りつかなくなった。生前は寵妃と言われていたが、田舎出身の変わり者だと母が酷評しているのを聞いたことがある。

酒で頬を赤らめたベルレナードが、愉快そうに唇をゆがめる。

「ああ。身内からの話だから確かだ。そやつが言うには……」

ひそやかに打ち明けられたのは、衝撃的な内容だった。

アルフォンスはしばし啞然とした後、胸が高鳴るのを感じた。

「素晴らしい……。それは間違いなくあやつを破滅させられますね！」

その話が本当なら、ベルレナードの言うように自分たちと関係のないところで、ユーゼリカ本人の素性だけで罪に問うことができる。いや、事実でなくてもいいのだ。嘘であつたとしても彼女の名誉は失墜するだろう。それくらい重大な密告だった。

反応に満足したのか、ベルレナードが舌なめずりしそうな顔で笑っている。

「まもなく皇宮中にこの話が流れる手筈になっている。おまえは手を出すな。他の者にやらせる」

蟄居ちつきよ中で側近も謹慎になっているというのに、まだそんな配下がいるらしい。不思議に思ったが、高揚していたアルフォンスは深く訊ねずうなずいていた。

「わかりました。私は引き続き、他に弱みがないか探ります。少し気になることもあるので」

「というところ？」

「森緑しんりょくの宮から城外へ出る馬車はすべて尾行させていますが、特に変わったことはありません。それが逆におかしいように思うのです。目的もないのになぜ出かけているのかと」

「頻繁に城外へ出ているのか？　行き先は？」

「週に数度という程度です。まったく動きがない時もあります。行き先はアカデメイアと教会と、あとはフォレストリアの領民が移住している街の様子見に行ったりしているようです。どこへも寄らず街を走ってそのまま帰ることもあります。他の候補者の偵察をしているのかもしれないが」「その何の気になるんだ？　暇つぶしに散歩することくらいあるだろうし、おまえの言うようにただの偵察かもしれないぞ」

買いかぶりすぎだと言いたげにベルレナードは眉を寄せている。

アルフォンスも今まではそう思っていた。だが尾行を続けてわかったことがある。

「ユーゼリカは尾行に気づいています。毎回こちらをまこうとするからです。その理由の一つ。我々に知られたくない行き先があるからでしょう。だから振りほどけないと悟ると、どこへも寄らず皇宮へ戻るのでは？」

これまでも監視はさせていたが、はつきり言って城内での動向だけだった。館に閉じこもっているという報告を鵜呑みにし、目を配っていなかったのだ。

エレンティウスの辞退以降、危機感を覚えてユーゼリカの監視を強化した。そこでようやく彼女の馬車がたびたび城外へ出ているのを知った。もちろん何らかの理由でそうすることはありうるし、それ自体はおかしなことではない。だが今まで自分が見逃していた間に何かしていたのだと気づいた時、背筋がひやりとした。その『何か』をつかまなければ危ないと思われた。

実際、ユーゼリカ自身は私宮にいるようだ。だからこそ何のために城外へ馬車を遣わしているのかが気にかかる。本人が出向かずともやれることはある。それは一体何なのか。

「ちなみに、経営しているらしき店には一度も行っていないようです。もしかしたら目くらましの噂だったのかもしれませんがね」

「店の経営は隠れ蓑だというのか？ 女ごときにそんな知恵が回るとは思えないが」

ベルレナードはせせら笑いながら聞いている。

皇女の経営する軽食と茶の店は繁盛しているようだが、彼女の関与があるらしいというほぼ確定した情報のみで、本人が立ち入っている様子は相変わらず皆無だった。そのため今ではそちらの監視を放棄した候補者もいるようだ。

「ユーゼリカ自身にはなくとも、誰かが入れ知恵した可能性はあります。今、あやつの立ち回り先を探っています。もしかしたら母親の遺産をもとに財をなそうとしているのかもしれませんが」

「遺産だと？ あの貧乏姉弟にそんなものがあつたのか？」

彼が信じないのも無理はない。父帝に見捨てられた森緑の宮の廃れようは、皇宮内とは思えないほどだ。遺産などあればもっとまじな暮らしをしているだろう。

だからアルフォンスもそこに目をつけてはいなかった。母がそのことをこぼすまでは。

「母に聞いて調べたところ、エルルーシユカ妃は父上から土地と館を賜ったらしいのです。どちらも皇都とその近郊にあります。ユーゼリカはそこへ行き、何かしているのではないのでしょうか？」

第二章

数日後、宮廷にとある噂が駆け巡った。

近年まれに見る大醜聞とも言うべきそれは、瞬く間に宮廷人たちの話題をさらった。

「お聞きになりました？ エルルーシユカ妃殿下のこと」

「驚きましたね。あんな貞淑そうなお顔で、まさか」

「でも納得がいきましたわ。森緑の宮の冷遇のされようは、これが理由だったのですわね」
眉をひそめ心配げに囁き合いながらも、どの顔にも堪えきれない好奇が浮かんでいる。

「ユーゼリカ殿下はご存じなのかしら。わたくし、心配で面会の申請をしてみましたのよ」

「まあ奇遇ね、わたくしもよ。どのような心境なのか、慰めてさしあげたくて」

「あら。もしご招待を受けられた時は同席してもよろしい？ 詳しいお話が気になるわ」

扇子の下で交わされるのは悪意のにじむ含み笑いばかり。

高貴な誰かが引きずり下ろされて絶望するさまを楽しむ見世物が、新たに開幕したのである。

その頃ユーゼリカは馬車で森緑の宮を出発したところだった。

先ほどまで書簡の整理に追われていたが、偵察に行った従者から監視がないとの報告を受け、出かけることにしたのだ。こうした突発的な出立も近頃では当たり前のようになっていた。

「また面会要請が増えたわね。一時は下火になっていたのに」

ここ数日やけに舞い込むようになった書簡を思い出し、首をひねる。

かつて地方貴族の青年との縁談が持ち込まれた時などはすさまじかった。事の次第を探ろうと面会を望む者が後を絶たず、机の上に山を成していたほどだ。件の青年が罪を犯して皇帝の裁可を待つ身となり、探りを入れるのがはばかられる事態になったため、興味本位で面会を求める者はいなくなった。おかげで平穏になったはずだったのだが。

「内容も似たものばかりだわ。体調を案じているとか異変はないか心配しているとか。宮廷に私の重病説でも飛び交っているのかしら」

怪訝けげんに思いながら窓の外を眺めていたが、返事がないので車内に目を戻した。

「キース？ どうかした？」

向かいに座ったキースが、はっとしたように笑みを浮かべた。

「申し訳ありません。少し寝不足で、ぼんやりしてました」

彼にしては珍しい失態だった。いや、主の言葉に返事をしないくらいで失態と言うのは狭量か。ユーゼリカは彼を二拍ほど見つめ、指示を出した。

「疲れているのね。毎度尾行をまくのに気力を使っているのだから。今日は私が見ているから、あ

あなたは休んでいて」

「いえいえ、姫様、そうじゃないんです」

「遠慮は無用よ。リラ、キースに枕を用意してあげてくれる？」

「……」

「リラ？」

隣をのぞきこむと、リラがびっくりした様子で目を瞬き、いそいそと予定表を開いた。

「はいっ、姫様。ええと、次に皇宮を脱出なさるお日取りは明後日になっておりますわ」

次も何も、今まさに脱出を試みている最中である。いつも皇女の一挙手一投足を抜かりなく見ていた彼女なのに、話を聞いていないとはこれまた珍しい。

ユーゼリカは二人をしばし見やり、ふうと息をついた。

「思えばあなたたち二人にばかり仕事を押しつけすぎていたわ。今日も下宿館にたどりつけるかわからないけれど、明日からしばらく休暇をとってはどうか？ 後でトマスに勤務表を届けさせ……」

言いかけて、ふと思い出した。

出かける前、そういえば執事のトマスも様子が変わった気がする。影武者を務める侍女のレネットは目を合わせなかったし、他の騎士たちもやけにそそくさと動いて落ち着かなかった。みんな忙しいのかと深く考えなかったが、あれはもしかや避けられていたのか。

ユーゼリカはちらりと二人をうかがった。

「何かあったのね？ 私に知られたくないようなことが」

二人がすばやく目を見交わす。一瞬だったが、困惑と狼狽がかすかに見えた。

思えば森緑の宮での従者たちもよく似た表情をしていた。どんな顔をすればいいかわからない、しかし繕わなければ——というように。

皇太子指名選に関することなら何でも報告してくるはずだから、それ以外で何かあったのだ。しかも相当まずい事態が。

これまでは都合の悪いことでも、いや悪いことだからこそ報告が来ていた。なのに今回は全員が隠そうとしている。ユーゼリカは顎に手をやり、二人をじつくりと見つめた。

「私に知られてはまずいことというと、何が考えられるかしら。陛下が乱心してまた戦を始めるだとか、どこかで皇帝の隠し子が発見されたとか、それしきのことはごまかすに値しないわね。——もしかして」

眼光が鋭くなった主人に、二人がぎくりとする。ほとばしる緊張感。

「考えるのも恐ろしいけれど、シグルスが落第した？」

がくり、とキースがあからさまにうなだれた。

「まさか。若君が優秀でいらっしゃるのはご存じでしょう」

「では何なの？」

従者たちが総出で口をつぐむなんて今までなかったことだ。内容に皆目見当がつかない。

視線に耐えきれなくなったのかキースが小窓のほうへ目をそらした。たまたまそうしたのでろろろが、ちょうど何か発見したらしい。意外そうに報告した。

「姫様、エンディミオン殿下の馬車です」

皇宮のはずれにある森緑の宮から、そう遠くない地点。宮廷のある本宮殿まではまだ距離がある。そんな場所でエンディミオンと行き合うとは珍しい。

前方で馬車が速度をゆるめ、停車した。御者台にいた従者が下りてこちらに合図をしている。

傍まで近づいて馬車を止めさせると、窓が開いてエンディミオンが顔を出した。

「ちょうどよかった！ 君を訪ねるところだったんだ」

ユーゼリカは怪訝な思いで窓を開けた。唯一同い年の姉弟で、会えば会話するが、別に親しいわけではない。特に今は来客を警戒しているため私宮に他人を入れるのを控えている。それは彼にも伝えているから知っているはずだ。

「あいにくだけど出かけるところなの。次からは連絡してからにしてくれるかしら。行き違いになったら気の毒だわ」

「連絡したんだけど、君、読んでないでしょ。大方ものすごい量の手紙が来てるだろうから、僕のも紛れちゃったのかもね」

勝手に押しかけてくるなど言外に言ったのだが、彼は気にしたそぶりもない。その台詞も引かなかった。

「どういうこと？ なぜ手紙のことを知っているの？」

「あー……、その様子じゃやっぱり知らないんだね。宮廷じゃ君の噂でもちきりだよ。君っていか君の母君だけど」

車内で、はつと息を呑む気配がした。

それに気づきつつも、エンディミオンの言葉に驚いてユーゼリカは身を乗り出した。

「噂？ どんな？」

姫様、と悲鳴じみた声をあげたのはリラだったか、それともキースが止めようとしたのか。

しかしそれよりも早く、ユーゼリカの耳にエンディミオンの能天気な声が届いていた。

「君の母上のエルルーシユカ様が、お付きの騎士と恋愛関係だったっていう密告があったんだって。父上とご成婚される前からの仲で、君はその騎士との間に生まれた子なんだってさ！」

旧フォレストリア王国の姫だったエルルーシユカは、ツエルバキア皇帝に見初められ、妃として嫁いだ。政略結婚ではあったが皇帝は彼女を熱愛し、皇后に準ずる扱いをすると約束してフォレストリアを併呑し、両国は強い絆で結ばれた。

しかし実はエルルーシユカにはひそかに想い合う者がいた。皇妃になる前から深い関係にあった二人は結婚後も密会を繰り返し、やがて彼女は身ごもった。

折しも皇帝が各領の視察に赴いていた頃である。どちらの子種であるかは明白だった。だが彼女は産み月を偽ることで赤子は皇帝の子だと言い張った。皇帝の第五皇女、ユーゼリカがそれである。ユーゼリカが不義の子であれば、当然ながら皇太子になる資格はないということになる――。



「つまり、資格がないから今すぐ指名選を辞退しろと。そう言いたいわけね」

情報を整理したユーゼリカは、無表情に言い結んだ。

エンディミオンから一報を聞かされた後、一行は回れ右して森緑の宮へと戻ってきた。

正直に言うと、あの直後は記憶がない。とりあえず一通り聞いたものの理解できず、放心状態になってしまったのをキースたちが連れ帰ってくれたのだ。

そこでようやくユーゼリカは従者たちの様子がおかしかった理由を知ったのだった。

「あなたたちは聞いていたのね。この噂のこと」

身じろぎもせず訊くと、キースが顔を伏せた。リラも沈痛な表情で涙を浮かべている。

「申し訳ありません。……どうしても姫様にはお伝えできませんでした」

二人はもともとフォレストリア王家に仕えていたのだ。かつての主の醜聞に打ちのめされているのがわかる。その上で、ユーゼリカに話が知られてしまったことを心から悔やんでいるのが伝わってきた。

他の従者たちも同じだろう。衝撃を受けながらも、ユーゼリカに悟られぬよう表情を繕った。けれどごまかしきれぬ自信がなく、結果的に避けるような態度を取ってしまったのだ。

「私が傷つかないように思ってくれたのでしょう。わかってるわ。ありがとう」

「……姫様……」

「では今の私の気持ちもわかるわね？」

静かに言う、ユーゼリカはゆっくりと立ち上がった。

寒気がするほど表情のないその顔を、キースとリラが息を呑んで見ている。

「見ての通りよ。激怒しているわ。あなたたち、知っていたのならもちろん噂の出所を追っているわよね？　これから私がどうするのも察しがついているでしょう？」

背後から凶悪な冷気が吹き出してきたような錯覚。怒りの感情は見当たらぬ、なのにこれでもかと伝わってくる――その迫力に二人とも圧倒されている。

「姫様、すべてでたためです、それは我々が証言します。どうかお気を静めて」

「当然よ。母上はそんな方ではないわ。だから絶対に母上の名誉を汚した輩を許さない。私を失脚させるために母上を貶めるなんて――必ず地獄を見せてやる」

まだ見ぬ宿敵に向かって呪いの言葉を吐くと、ユーゼリカは大きく息をついた。

つまりやりたいことはそれだ。頭に血を上らせて騒げば相手の思い通りになるだけ。

冷静にならねば。この状況を覆し、母の名誉を回復するために。

「でたためなのはどうに承知よ。厄介なのはこの話が皇宮中に出回っていることだわ。多くの人々にとつては真偽は大して問題ではない。とにかく楽しめればいいのだから。けれど当事者には命取りになりうる。私を追い落とすだけでなく罪を負わせるつもりだわ。その前に手を打たなければ」キースが硬い表情で見つめてきた。

「そんなことはさせません。姫様には申せませんでしたが、耳に入った時点で情報源を追っていま

した。宮中のいくつかのサロンまでは絞り込めています」

「では目処はついているのね？」

「はい。おそらくはあの方ではないかというところまで」

どの宴で発生したものか、それを主催したのは誰か、そのサロンにいたのはどこの一派か。探ればある程度はわかるから、あとは確認だけなのだろう。

ユーゼリカは椅子に腰を下ろし、組んだ両手を顎に当てた。次にやることはただ一つだ。

「確定したら教えてちょうだい。直ちにお訊ねに伺うわ」

まだ見ぬ相手を射すくめるように一点を見据えながら、殴り込みの宣言を下したのだった。

その宮殿は、離れたところからも光り輝いて見えた。

円形の屋根を冠した塔と城壁。主である妃の生まれ故郷のように、東洋と西洋の建築文化が融合した異界のごとき浮世離れさと、金脈豊かな旧王国の援助を物語るような金色に彩られている。その名も『黄金の宮』という。

件の噂を知ってから数日後。ユーゼリカは乗り付けた馬車からその門前へと降り立った。

門扉も建物も庭園の四阿やベンチまで、すべてが金一色。陽射しを浴びて目に痛いほどだ。

それらを冷ややかに見やり、玄関へと歩き出すと、どこからともなく使用人たちがやってきた。貴人の風貌に似合わぬ地味なドレス姿を見て、どんな身分の者なのかと戸惑った顔をしている。

「失礼ですが、どちら様でしょうか？」

「第五皇女のユーゼリカ殿下です」

一緒にいたキースが答えると、彼らはすばやく目を見交わし、含み笑いのような顔つきになった。例の噂を聞き及んだことだろうが、曲がりなりにも皇族に面と向かってする表情ではなかった。

「どういったご用件でしょうか？ お約束はございますか？」

「皇女殿下がわが皇子殿下とのご交誼を賜っていたとは存じませんが……」

まさに慇懃無礼といった態度。顔に浮かんでいるのは明らかに侮りだ。皇女の前に立ちはだかり、行かせまいとするような振る舞いも、通常ではありえなかった。

あまりの非礼さにキースが口を開きかけたが、それを制し、ユーゼリカは彼らを眺めた。

「妹が兄を訪ねて来たのだけれど、約束が必要だったかしら？」

まさか皇女本人が口を聞くとはい思わなかったのか、使用人たちは驚いた様子を見せたが、面を伏せて答えた。

「めっそうもない。ご兄妹ならばその必要はございません。ですが、皇女殿下がこちらへお越しになるのは何分初めてでございますので、いかようなわけでおいでになったのかと……」

「おまえは扉番のようね。そちらのおまえたちは小間使いといったところかしら」

「は？ —— はい、さようで……」

「では、私は？」

突然おまえ呼ばわりされて虚を突かれた様子の男たちが、はっと顔を上げる。

「私は、誰？」

「……っ」

宮殿の使用人に過ぎない彼らが皇帝の娘に対して取る態度ではないと、やっと気づいたのだろう。凍り付くような皇女の視線を浴びて、彼らの顔からみるみる血の気が引いていく。

「黄金の宮は使用人の教育がなっていないようね」

「い……いえ、皇女殿下……」

狼狽する彼らを見据え、ユーゼリカは冷たく命じた。

「おどき」

静かだが有無を言わせない一喝に、男たちが恐る恐るといった仕草で道を空ける。

彼らを一瞥もせずそこを通り抜けると、モザイク模様が美しいタイル細工の前庭が広がっていた。両脇に生い茂る濃い緑の木々が黄金の宮殿に映えている。遠くに見える使用人たちはツエルバキア風の服装だったが、色はすべて白なのが印象的だ。

異国情緒あふれる宮殿に感動する余裕もないのですたと進んで行つたが、正面玄関にたどり着く前に、諦めきれなかったらしい使用人たちが背後から食い下がってきた。

「あの、お取り次ぎをいたしますので、しばしお待ちくださいませ」

「皇子殿下のご予定もございますので」

ユーゼリカは歩を緩めなかった。あいにくのんびり取り次いでもらうような精神状態ではない。その隙に相手に逃げられでもしたら困る。

待つつもりがないのを悟ったのか、再び使用人たちが行く手を阻むように回り込んでくる。

「さつきから無礼だぞ。お叱りのお言葉をもう忘れたのか？」

「しかし、このようなことは困ります」

「突然のご訪問こそ無礼ではないですか」

今度は我慢できずキースが声を荒らげ、使用人たちも応戦してくる。よほど中に入れたくないのかと、ユーゼリカが思った時だった。

「——なんの騒ぎだ？ うるさくて昼寝もできない」

横手から聞こえた声に目をやると、第五皇子のジオルルトが歩いてくるところだった。

シャツの胸元を大きく開け、肩から上着を羽織った恰好で、癖のある黒髪を無造作にかき上げている。私宮でくつろいでいる真つ最中だったようだ。目が合った彼は面白そうな表情をした。

「へえ、珍しい顔がいるじゃないか。何か用か、ユーゼリカ？」

大して驚いた様子もない。まるで訪問の理由を察しているようだ。

ユーゼリカは完璧な無表情でその視線を受け止めた。

「ジオルルト殿下にお訊ねしたいことがございまして」

従者たちが調査してきた噂の根源——それがどうやら彼らしい。

その報告が入ってすぐに訪ねてきた。手紙での問い合わせではごまかされると思ったからだ。

ジオルルトは唇の端で笑うと、使用人たちを下がらせた。それから親指で背後を示す。

「母上に来客中だね。中でもてなせないんだが、代わりに庭を案内してやる。それでもいいか？」

正面玄関の両側に、奥へ続く小道があった。ユーゼリカが承諾すると、ジオルルトはそのうちの片方へと促した。

「この向こうに秘密の部屋がある。今もそこでうたた寝してたところだ」

石畳の小道の脇には小川が流れ、見たこともない花樹がそれに沿って植えてある。白い小さな花が群生するさまは、金色の宮殿に不思議と合い、より異国の雰囲気醸し出していた。

小川の先にはガラスの小屋が建っていた。中には青々とした木々の鉢植えがいくつもあり、それらに埋もれるように真つ白な長椅子がある。これが彼の秘密の部屋らしい。

「長くなりそうなら茶でもどうだ？ 特別に振る舞ってやるよ」

「結構です。伺いたい内容は一つだけです」

「ふん。なら一人でやらせてもらうぜ」

冷やかな返事にジオルルトは肩をすくめたが、気分を害すどころか楽しむような顔つきだ。

小屋の中は温かく、ほのかに甘い香りが漂っていた。生い茂る植物は果物の木のようなのだ。南国を模した温室らしい。

「で？ 俺に聞きたいことってのはなんだ？」

葡萄酒を杯に注ぎ、ジオルルトがテーブルに腰を預けてそれを口に運ぶ。ユーゼリカは油断なく見据え、間を置かず言った。

「私の母に関する噂が流れています、ジオルルト殿下の仕業ですか？」

ジオルルトの表情がわずかに動く。ずばり訊かれるとは思わなかったのだろう。口をつけていた